ISSN 1347-5436

青森県の民俗 第4号

MAY／2004年

目次

■論文・研究ノート
青森県昔話研究のあゆみ……佐々木 達 1
民俗学と歴史教育 ―酒井忠雄の歴史教育論を手がかりとして― …菅 一典 12
東津軽郡平内町のオコモリ……村中 健大 20
四国香園寺子安弘法大師像の下北半島への伝播
―弘法大師信仰の受容と変容―……長谷川 方子 38
現代巡礼をめぐる認識について ―津軽地方における調査から― …石山 晃子 54
民俗学とかかわる民族誌映画……大森 康宏 68
■資料報告と問題提起 〈家の祭り〉
家の祭り……大湯 卓二 79
青森県南部地方の屋敷神……大湯 卓二 80
中野神楽におけるイエの祭り―三戸郡南郷村中野地区の事例から―
……アンドリューズ・デール 95
旧弘前城下のイエの神々の年越し
―風邪神、内神、疱瘡神、山の神、ゴンゲン―……小山 隆秀 102
行事の側面……三浦 貞栄治 109
不吉なザシキワラシ……寺沢 一人 112
■採集ノート
津軽海峡を渡ったオシラサマ……大湯 卓二 116
大漁祈願―佐井村矢越の福子稲荷と類似儀礼―……櫻庭 俊美 121
■書評
川島秀一著『漁撈伝承』……小池 淳一 132
青森県史叢書『下北半島西通りの民俗』……工藤 紘一 138
■追悼 夏堀謹二郎先生
「ことんこん」「あいさつ鳥」「頭の白いカラス」のことなど……小熊 淳 144
夏堀先生から受け継ぐもの……小池 淳一 146
夏堀謹二郎先生と「村の話」……佐々木 達司 149

青森県民俗の会

【資料報告と問題提起】 〈家の祭り〉

中野神楽におけるイエの祭り

―三戸郡南郷村中野地区の事例から―

アンドリューズ・デール

一 はじめに

イエを舞台に行われてきた信仰に基づく行事や祭りは、戦後民法によるイエ制度崩壊の影響を受け、近年の農村においても希薄になった感がある。そのようにして古い習慣がすたれつつある現代ではあるが、青森県三戸郡南郷村において、今もなお年に一回開催される春祈祷は、人々の紐帯の機会となっている。

本稿では、南郷村で現在も活発に活躍している「中野神楽」を事例に取り上げ、小正月の春祈祷で実施されている、カドウチとオミキアゲに注目することにしたい。この行事に注目することで、現代日本におけるイエと信仰の関係を明らかにできればと考える。

二 中野神楽

南郷村においては複数の神楽保存会が活動しているが、中野地区では、中野神楽が同地区出身の七人の男性により伝承されている[1]。この山伏系統の神楽で中心となる演目は、「権現舞」である。この舞で焦点となる「権現様」（獅子頭のこと）は、少なくとも二百七十四年前からこの地で神様として祀られてきたと考えられている。「享再光中野村中常院享保十五年十月六日」という獅子頭にある銘が、権現様の古さを示しているというのである。中野神楽で祀る権現様は「中野権現様」と称され、中野金毘羅大権現とも呼ばれている。

村の歴史を調べる際、中野家が中野舘からやって来てこの地区を治めたという伝承が地元で広く聞かれる。長年この村に暮らした中野家は、戦後になって村を出た。ただ、離村する前までは、中野かくお氏が村社であった月山神社の「別当」（神職）を務め、中野神楽と一緒に春祈祷に歩き回っていたと言われる。中野神楽の権現様は、「神楽堂」あるいは「権現堂」と呼ばれる建物に納められている。この神楽堂は、中野家の元の屋敷地に建っている[2]。現在、神楽堂には、権現様と中野家の先祖が信仰対象として祀られている。同堂には、中野神楽の師匠たちが使った神楽の面が十三枚納められており、今では神楽の衣装や道具なども置かれている。中野神楽は、この神楽堂で準備をした後、地域の神社祭礼や村内外のイベントに出発する。

この神楽保存会にとって、地域の神社祭礼で演じることの重

要さを別にするなら、小正月の春祈祷は一年のうちで最大の行事である。カドウチ、そしてそれと緊密に結ばれているオミキアゲというイエの祭りを見ると、イエと神楽の深い関係が明らかになるのである。そこからは、年中行事を通じて当該地域のイエが相互に結ばれていることを知ることができる。ここで紹介するのは、カドウチとオミキアゲ双方に関係する、中野神楽の春祈祷である。

三　春祈祷の構成要素

（一）マイタチ（舞発ち）

春祈祷において、地区の各家を歩いて回るカドウチが始まる最初の段階は、マイタチ（舞発③）である。カドウチを開始するため、まず最初に寄っていくイエは、以前から中野地区の「旦那」と目され、歴代村長を輩出した市沢本家である。市沢本家では、中野神楽の男たちがやって来て、「春祈祷で歩きますよ」と伝える行事がある。神楽が市沢本家を訪問する際には、舞を舞うこととなる。普段は以下に紹介するオミキアゲという形になるが、都合により省略して、後で説明するカドウチの訪問と同様の内容となることもある。

マイタチを行なう理由を、市沢氏はカドウチをやっている最中に中野神楽に災いが起こらないためと説明する。カドウチの始まる前日までの間に、マイタチをするため中野神楽は市沢本家に一回参る。このマイタチが終わることで、本年度のカドウチは本格的に始まることとなる。

昔は、市沢家の屋敷地に幕を張り、旧中野村の人々が大勢集まって、夜遅くまで神楽の舞が行われた。その時には、芸を見るのみならず、ご馳走を食べる楽しみもあった。村人にとっては、長い冬の娯楽としての楽しみであったのである。祭りに参加するのは市沢家の分家に限られない。市沢本家で行なわれるマイタチは、イエの祭りであるのみならず、村の祭りでもあった。市沢系統の本家であるこのイエは、今でも、春祈祷の起点のイエである。ただ、そのような形のマイタチも、現在ではスケールが小さくなって、市沢本家の家族のみが神楽の来訪を歓迎して行われている。

（二）カドウチ（門打ち）

現在の中野神楽は、踊り手（権現舞）、小太鼓、笛、旗持ち、別当が各一人、そして手平鉦二人の合計七人で構成されている。行列の順番は厳密には決まっていないが、別当と旗持ちは必ず先頭に立つ。カドウチをする家に来ると、まずその玄関の前に神楽保存会のメンバーが並ぶ。以前までは、神楽の師匠が「御免下さい。中野の権現様が春祈祷に上がりました」と挨拶をし、イエの人が「お願いします」、「お待ちしていました」などと答えることで、春祈祷が開始された。

カドウチという名前は、家の入り口や玄関で行なうことから付けられたと考えられている。そのことを示すように、神楽保存会のメンバーは家の中に入らず、玄関で囃子を流しながら「権現舞」を三分程度舞う。この時、イエの人は玄関に立ったり座ったりして、神楽の人々を歓迎する。権現様は「火伏せの神」と考えられており、火事が出ないようにと、権現様を舞う男が玄関の前で、イエの人の用意した水を屋根に撒く。舞が終わると、イエの人から祝儀と米をもらう。もらった米は、旗を持つ男が背負っているオサゴバコ④という箱に入れてもらう。またその時、神楽保存会の方からは、台所や神棚に貼る「中野金毘羅大権現　家内安全・五穀豊穣」という祈願の神札を渡す。その後、権現を使って、身体堅固のためにイエの人の頭や肩を咬む。

カドウチが行われるのは、二年に一回である。旧正月の一月一日が過ぎると、中野権現のカドウチを開始することができる。これは上述した通り、マイタチを終えてからということである。「カスミ」と呼ばれる春祈祷の活動範囲は、南郷村大字中野、大字市野沢、大字大森の一部（泥ノ木、狐久保）である。大森の一部は昔中野の領域に入っていたので、現在の行政区を超えて行われている。同様に中野の集落の成立は市野沢より古くて、中野から分家したイエが多く市野沢に移住した関係で、中野神楽のカスミに入っているものと推測される。権現様を祀る範囲は、厳しく限定されている。その範囲を超えることは、いけないことと昔から伝えられてきた。他の地区は他の権現様のカスミであるという認識が、今でも強く持たれている。ただし、依頼に応じては、カスミを超えてどこにでも行けるとも言う。ただその場合には、依頼されたイエにしか行けないという条件が付けられていた。例えば、カスミの範囲外にあるイエに頼まれても、その隣のイエには寄ることはない。ここからは、中野神楽が地区ではなくイエに行く、という根本的な観念が明らかになる。中野神楽の男たちは、今でもこの規則を守っている。

カドウチでカスミの全域を回るまでには、おおよそ九日間かかる。日中にカドウチをやる時期には、夕方になると、中野神楽は頼みに応じてオミキアゲというイエの祭りも演じる。

（三）オミキアゲ（お神酒上げ）

カドウチとは異なり、オミキアゲが行われるのは、家の中である。この祭りは、春祈祷の持つもう一つの側面である。日中カドウチで家々を訪ね歩いた神楽保存会のメンバーは、その日のカドウチを終えると、オミキアゲの準備のため、午後四時頃に依頼されたイエに集まってくる。イエによっては、イエの主人が呼んだ客がその前後に集まってくる。イエの人は戸を開けて、玄関で中野神楽のメンバーを迎える。玄関に立つとまず、囃子を始める。神楽保存会の一人が玄関で御幣を用いた祓いをしている内に、もう一人が権現様を持って舞をする。その後、

イエの者が用意したバケツなどから柄杓で水をすくい、玄関の上の屋根に水を掛ける。三分ほどで舞が済み、挨拶しながら家に入る。そうして、本日のオミキアゲの準備が始まることとなる。カドウチと違う点は、オミキアゲは、このように家の中で行われることなのである。

準備している間、権現様は家の床の間に納められる。主人は、用意した祝儀を供え物と一緒に権現様にお供えする。理由は不明だが、祭りの時に権現様に供える料理の中に、葱を用いることは禁じられている。

中野神楽はオミキアゲをする際、イエの人々などが見守る中、春祈祷として神棚などに飾る幣束を新しく作ったり、注連縄などを取り替えたりする。そしてこの時、保存会の人々によって二年前に供えた幣束が取り替えられる。この地域で用いられる幣束には、いくつかの種類がある。神楽保存会の人々は、そのイエの神様の数と種類とに合わせて幣束を作る。祀られる神様の数や種類が、地区のイエごとで異なっているからである。作られた幣束はそれぞれの神様の所に飾られ、そのイエの神棚や屋敷内にある神社や祠で普通二年間祀られることとなる。その時に降ろした古い幣束などは、イエの人が月山神社の「ドントン焼き」の際に燃やす。種類に関しては、例えば、恵比寿大黒には俵と鯛の形の幣束を作り、稲荷を祀っているイエには狐の形に切れた幣束を作る。幣束作りが終わったら、中野神楽は神楽の衣装に着替えて、本番のオミキアゲに進む。

準備が全部終わると、「お神酒上げをやりますか」そして「お願いします」という、神楽保存会とイエの主人との間の決まったやり取りの言葉がある。

神楽を演じる場所は、依頼のあったイエの一室である。舞を舞う前には、神楽保存会とイエの者が御幣を使って部屋の中を祓って清める。「春祈祷歌」という神歌を唱えるが、これにより、神楽と関係する「八百万の神」を家に呼び集めるのだと神楽保存会では説明する。「〇〇家内一同並びに〇〇家内一同」のように集合した参加者のイエの名前を述べ、それぞれのイエの構成員のために、家内安全・交通安全・商売繁盛・身体堅固の祈願をする。

こうして次に、神楽舞に入ることとなる。イエの者に舞の好みがあっても、踊りの演目は中野神楽に任せられている。神楽の演目には、権現舞、鶏舞、三番叟、番楽、杵舞、盆舞、山神、荒神舞、翁舞、武士舞、剣舞の十一舞のレパートリーがある。以前は鐘巻舞という演目もあったが、師匠から伝えられなかったため、現在は行われない。昔は踊りがうまくできれば、観客からは祝儀が渡され、神楽の男たちが次々に踊ったと言う。その順序は、権現舞が最初に踊られるのが基本である。その後、時間の都合により、さらに二つぐらいの演目を加えて舞う。家などを新築した場合には、山神舞を必ず踊る。それは、家の木

材は山から取れるから、山神に感謝するという意味である。

昔から、中野神楽は基本的な習慣として、本家を回ってオミキアゲをするものだと言われる。それは、本家は祭祀の支出が負担できるイエであると考えられたためである。この理由でオミキアゲを挙げるイエは原則的には本家であったと考えられているが、実際、現在のオミキアゲでは、分家もその半分ぐらいが行っている。オミキアゲを挙げる本家と分家は、マイタチのイエを含めて四軒ある。中野地区にはこのうちの三軒があり、マイタチを行なう市沢本家、そして古館家と舘野家という二つの分家である。大森狐久保には、久保本家がある。歴代村会議員が三代も誕生した古舘家には、初代の時代から家でオミキアゲが行われていたと言う。舘野家は上述した中野家の元の屋敷に居住していて、現在、神楽堂を管理しているイエである。これ以外のイエに頼まれる場合は、家の新築やその他の祝いなどの目的で依頼されることが多い。

久保家では、いつも旧一月十六日にオミキアゲをやる。市沢家と久保家では、開催する日が定まっているが、他のイエは中野神楽が毎回行くにもかかわらず、日は決まっていない。それはイエと神楽保存会の都合によって異なってくる。大体一週間前ぐらいに日を決めることが普通である。具体的には、イエの主人が中野神楽保存会に依頼することになる。そして日が決まってから、客として呼ぶ親戚に連絡する。開催するイエが分家であれば、一番先に連絡するのは本家である。オミキアゲの会場の席順は、本家の隣に分家した順番に分家の当主が並ぶこととなる。

中野神楽が行かない年でも、この日、久保家では「掛け軸祭り」を行なう。久保家では、毎年十軒の分家を呼んで、数多くの神仏が書かれた掛け軸が飾られた前で、ご馳走を食べる。カドウチの年には、中野神楽がやって来る。昔から、オミキアゲに出される料理はあまり変わらない。地区の出羽三山の行屋堂の祭りと同じ精進料理を出す。その際には、肉・卵・魚は禁じられている。今でも、母娘がお膳を用意する。

他に信仰的な規制としては、亡くなった人が出た場合、カドウチの春祈祷を依頼しないイエが一般的である。そのため、この一年に不幸があったイエを知っていれば、神楽はそのイエに寄らないで通過することが普通である。不幸は、親類のイエを含めて、その年の「オミキアゲを中止するイエ」と言う。現在、中野神楽は「墓獅子」をやらないが、師匠の時代には墓の所でも舞をした。ということは、中野神楽にとって忌みがかかる心配はなかったと考えられるが、不幸があった場合、イエ側で遠慮して神楽に依頼しないものといえよう。

（四）オミキビラキ（お神酒開き）

舞が終わると、オミキビラキという会食が始まる。神楽を演じた一室にテーブルを揃え、一方に神楽保存会のメンバーが並

んで座る。その反対側には、イエの構成員または本家・分家や親戚などが座る。まず初めに、神楽保存会の一人が、イエの人を始め、参加者皆に酒を注ぐ。そして神楽は「頂きます」と言いながら、全員が互いにお辞儀をして二回手をたたき、酒を飲み干して乾杯する。それから保存会側から自分が飲んだ猪口を向かいに座るイエの人に渡して、酒を注ぐ。この時保存会の男たちは、座ったまま手拍子をとりながら歌う。イエの人達は、もう一回乾杯する。その後、保存会がもう一回歌う。歌い終わると、神楽保存会の男たちの膳から、食べ物を向かい側の相手に箸で渡す。イエ側はそれを手で取って食う。そして、もう一回イエの者が乾杯する。また酒を入れ、神楽の男たちが歌う。今度はイエの人達が猪口を空けてから、その猪口を保存会の男たちに返す。現在では三回このやり取りが行われているが、昔は、九回ほどやった。

その後、皆は気楽に飲みながら、食事をする。場所が権現堂から近ければ、途中で権現様を堂に納めに行き、また飲み会に戻ってくる。舘野家では、家から持っていった時、権現様を撫でながら、「有難う神様、来て下さって本当に有難い」とお婆さんが語りかけていた。

久保家には、泥ノ木から譲ってもらった権現があり、それをイエで祀っている。その権現は男であり、中野神楽の権現は女であるという。久保家で舞われる際には、中野権現を一晩泊めて、男の権現様と並べて安置する。人が泊まっても、中野権現様はその日のうちに舞った家から必ず帰らなければならないという規定があるが、久保家は例外である。何らかの理由で、四百年ほど前に、中野権現様を久保家から権現堂に移したという言い伝えが今も聞かれる。そのため、オミキアゲをやる時に「権現様が二年に一度帰ってくる」と久保氏は言う。

(五) マイコミ（舞込み）

マイコミは、本年のカドウチ及びオミキアゲを完了するという意味を持った神楽の構成要素の一つである。昔は、師匠たちの家が交代でマイコミの舞台となったが、現在は地区の公民館を借り、中野神楽がその年オミキアゲを挙げたイエの主人を呼んで供応する。これはカドウチをやる時、毎回オミキアゲを挙げてくれることに感謝するためだと言う。この時、神楽保存会の奥さんたちが料理を作り、保存会の全員とオミキアゲを挙げた各イエの主人が参加する。当然、その年オミキアゲをやったイエの数は、マイコミに参加する人数に反映する。昔は、この場でも舞を舞ったそうだが、現在では行っていない。

四　おわりに

見てきたように、中野神楽が行なうカドウチ及びオミキアゲに際しては、その執行に本質的な影響を及ぼすのは、この地域

の人々の間に生きているイエに対する意識であろう。中野神楽が地区ではなくイエをめぐるということから明らかになるように、この地区における春祈祷は、イエを通して地域社会を統合させる機能を果たしてきたものと考えられる。

とはいえ、カドウチとオミキアゲとでは、その意味が若干異なっている。中野神楽が行うカドウチは、地区の数多くのイエを対象にする。家の外で舞を舞い、そのイエの安全を祈願する。ここでカドウチの対象となるのは、必ずイエ単位である。この時神楽の来訪を歓迎するイエの人は家長に限られず、留守番をする人誰でもがこの役を引き受けられる。他方、オミキアゲの場合には、一つのイエが神楽を催す際に、参加者は複数のイエの人から構成されていることが通例である。しかもオミキアゲはカドウチと同じカスミで行なうが、関与するイエの数は比較的に少ない。隔年にオミキアゲをやるイエは、社会的に重視されていることを示す。村人の意識では、こういったイエは昔から続いてきた「旦那」、または本家などと称せられるイエである。要するに、周期的にオミキアゲを催すためには、ある程度の経済力が必要であったと考えられる。しかしながら現在のオミキアゲは、必ずしもそのような信仰だけで行われているわけではない。それにもかかわらず、イエとイエの結び付きを維持する機能は、昔ながらの形式で行なわれていた当時とは変わっていないという点が、オミキアゲというイエの祭りのキー・ポイントである。

本稿では、春祈祷で行われるカドウチとオミキアゲというイエの祭りが、この地区の家々を大きく結びつけていることを明らかにした。しかし現代のイエとイエの関係の衰退は否定できない。ただし村は相互に関係づけられたイエの交流によって組み立てられる社会であるから、こういった行事は重要な役割を果たし続けている。今後もこの問題意識に沿って、イエと信仰の繋がりをさらに探求したいと思う。

《注》

(1) 北村古心氏が書いた『南部神楽—奥州南部（八戸地方）の神楽』（年代不明：昭和十年頃か）により、中野神楽は以前から七人の組であった。

(2) 阿部達が記録した『旧南部領域における山伏神楽伝承と笛奏法の採集考察』（年代不明）の中では、「中野かくお氏の父にあたる人」は別当で、中野神楽と関係したとされる。

(3) 「舞発」とは、中野神楽の師匠が推定した当て字である。

(4) この通称は師匠から聞いたもので、正式な呼称は分からない。